

## ■ 編集だより

## 編集後記

投稿論文を査読させていただいていると、以前には見かけられない表現が散見される。リハビリテーションを「リハビリ」、筋肉注射を「筋注」、経過観察を「フォロー」など、確かに臨床現場でよく使われている言葉であるが、雑誌に掲載する場合には、省略せずに記載する習わしである。しかし、電子メールやSNSでは普段の会話感覚で、自分の思いを表現することが日常茶飯事になっており、チャットやツイッターは文字制限があるため、短くコンパクトに自分の思いを込めることが上手になっている。短縮してまとめることに長けてきたのはよいが、必要以上に言葉を省くことが目立つ。

例を挙げると、「リア充」は現実生活に充実している人、「インスタ映え」インスタグラムに映える写真のこと、「りょ」は了解、「おけ」はOK、「それな」はそうだねと共感をしめす意味となる。ここまでなら50歳代の私もついていけるが、「卍」は調子にのる、仲間との絆の意味、「ふぁぼ」はお気に入りのこと、「リアタイ」はリアルタイム、「パリビ」はパーティーピープルの略でありパーティーでのりよく盛り上がりたい人のこと、「エゴサ」はエゴリサーチでインターネット上で自分自身の評価を検索することらしい。しかし、よく考えみると1970年代でも、「ワンチャン」「パンピー」など略語がなかったわけではないが、これだけ多くの人が使うようになったのは、最近ではないかと思う。

略すという文化が流行る背景には「面倒くさい」というキーワードが頭に浮かぶ。

話は変わるが、バブル時代の夢といえばマイカー、マイホームであったが、今の若者は所有欲が薄れ、車は単に移動のツールであり、レンタルやシェアで十分と考える人が多くなった。アウトドアの好きな人が自分で道具を買い揃えるのではなく、必要な時に使えれば十分という思いからキャンプ用品から服装までレンタルする時代である。物への愛着が失われ、必要がなくなったら売って新しい物へとフリーマーケットアプリを通して取引されるようになった。使わずにしまっておくだけの無駄な物が、他の人によって価値のあるものになるという合理的でよい側面もあるが、ここでも「面倒くさい」という考えが見え隠れしている。

さらに言うと、インターネットの検索サイトをみると、検索語を入力するのが面倒だから、頻用される言葉を予測検索してくれたり、検索履歴を参考にして使用者が望んでいると思われるサイトを紹介してくれるサービスまである。こちらの手間が省けて非常にありがたい反面、自力で検索する能力が鈍る、さらには自分の気持ちを見透かされているのではと、恐ろしく感じる。面倒くさいという気持ちから省略という合理化に向かい、その代償として、本来持っている能力が失われていく。省略語が生まれ流布するには何らかの理由があり、それは時代の流れとして必然のことであるのは重々了解できるのではあるが、その中で今まであった表現が失われるということも忘れてはならない。その意味でも、ただ流行っているから本誌の紙上でも、略語をそのまま受け入れていいのには慎重であるべきだ。時代の流れに対応しながらも、残さなくてはならないものを見失わずにいたい。改めて襟を正して、査読にあたらなくてはと実感する。

忽滑谷和孝